「召し使いたちへの勧め」　　2026 年 01 月 28 日

召し使いたち、心から畏れ敬って主人に従いなさい。善良で寛大な主人にだけでなく、気難しい主人にも従いなさい。不当な苦しみを受けても、神のことを思って苦痛を耐えるなら、それは御心に適うことなのです。罪を犯して打ち叩かれ、それを耐え忍んでも、何の誉れになるでしょうか。しかし、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、これこそ神の御心に適うことです。あなたがたは、このために召されたのです。キリストもあなたがたのために苦しみを受け、その足跡に続くようにと、模範を残されたからです。「この方は罪を犯さず/その口には偽りがなかった。」罵られても、罵り返さず、苦しめられても脅すことをせず、正しく裁かれる方に委ねておられました。そして自ら、私たちの罪を十字架の上で、その身に負ってくださいました。私たちが罪に死に、義に生きるためです。この方の打ち傷によって、あなたがたは癒されたのです。あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は、魂の牧者であり、監督者である方のもとへ立ち帰ったのです。(Ⅰペトロ 2：18～25)

著者は、召し使いたちに対する勧めの言葉を書いている。召し使いは当時の奴隷身分の人を指している。まず、「召し使いたち、心から畏れ敬って主人に従いなさい。善良で寛大な主人にだけでなく、気難しい主人にも従いなさい」と言う。召し使いは主人から不当な苦しみを受けることになっても、神がその苦難に耐えることをお望みであるとわきまえて、忍耐するなら、それは、神の御心に適うことである。罪を犯した時、打ち叩かれ、それを耐え忍んでも、何の誉れにもならない。善を行って、そのため苦しみを受けた時、それを耐え忍ぶなら、神の御心に適うことである。あなたがたが召されてキリスト者になったのは、苦しみを受けても、耐え忍ぶ者になるためであった。イエス・キリストもあなたがたのために苦しみを受けられたが、耐え貫かれた。著者は、主イエスの十字架の苦難を模範にするようにと勧めている。イエス・キリストは、「『罪を犯さず/その口には偽りがなかった。』罵られても、罵り返さず、苦しめられても脅すことをせず、正しく裁かれる方に委ねておられました。そして自ら、私たちの罪を十字架の上で、その身に負ってくださいました。私たちが罪に死に、義に生きるためです。この方の打ち傷によって、あなたがたは癒されたのです。」イザヤ書 53 章の「主の僕の歌」で預言されているように、主イエスは、私たちの罪をご自分の身に負われて、十字架で死なれ、罪を赦し、神の義に生きるようにしてくださった。あなたがたは羊のようにさまよっていたが、主イエスの受けた苦難と死によって、癒され、義とされる救いを得た。だから今は、魂の牧者であり、監督者である主イエスのところへ戻って来たのである。これは、パウロの信仰理解を踏襲する福音の核心である。主イエスが十字架の苦難と死を耐え忍ばれたのは、人を何ものにも犯されない、尊い、神の義をいただく存在にするためであった。著者は、召し使いに、気難しい主人にも、従順に善をもって仕え、苦しみに耐えなさいと勧めている。主人から理不尽な扱いを受けても、それは、主イエスの苦難につながることであるという理解に基づく勧めである。奴隷制度に異議が唱えられたのは、紀元 18 世紀頃からで、Ⅰペトロが書かれた時代は、奴隷は当然の存在とされていた。今日の価値観からは、受け入れられない勧めではあるが、著者は、互いに平穏に過ごすことを望んで、主人に従う召し使いの苦労は、キリストの十字架の苦難にあやかり、救いに至ることだと励ましたのではないか。